

日本オペラ振興会 オペラ歌手育成部

小畑恒夫

よく「藤原のオペラ研修所」と言われるが、「日本オペラ振興会」の「オペラ歌手育成部」という名称が正しい。

1934（昭和9）年に創設され、初の本格的なオペラ団体として日本のオペラ界を牽引してきた「藤原歌劇団」と、その活動を1958年の教育オペラ研究会にさかのぼることができる「日本オペラ協会」という二つのオペラ団体が、1981年に合併・統合したかたちで、新たに日本オペラ振興会が設立された。両団体の名称は新組織の公演事業部門として残され、前者は西洋オペラを、後者は日本オペラを担当している。1981年にこの新組織が作られた時、歌手およびスタッフの育成も重要と考えられ、この「オペラ歌手育成部」が作られた。したがって、西洋オペラだけでなく、日本の創作オペラでも活躍できるオペラ歌手を育てようというのが、この育成部の理念なのである。

今回このレポートの執筆にあたって、「オペラ歌手育成部」の岡山廣幸・育成部長にお話をうかがったが、ヨーロッパのオペラと日本オペラの歌唱における問題について明快な説明をいただいた。外国語であれ、日本語であれ、技術的な発声法はイタリアのベルカントである。ただ、耳に美しい日本語、聞きとりやすく理解される日本語の方法（滑舌、歌唱法）は学ぶ必要があり、それには日本オペラ協会の総監督であり、日本語唱法の大御所である大賀寛のメソッドが生かされていると言う。

冒頭に「藤原のオペラ研修所」ではないと書いたのは、名称だけの問題ではなく、将来の活躍の場所として二つのオペラ部門（二つ

のオペラ団体としての伝統を残している）をもつこの育成部の位置を明確にするためである。

＊

育成部の目的は、文字通りオペラ歌手の育成である。日本のオペラ界を牽引するような高いレベルの公演を行っている「日本オペラ振興会」の育成部であるからには、そうした舞台上で活躍できるプロのオペラ歌手を育てるという高い目標を掲げているのは当然だろう。

一般には音楽大学や大学院では必ずオペラの授業があり、オペラ歌手の育成がなされているものと考えられているが、実際には多くの音大で経費のかかるオペラの授業は敬遠されがちだし、学生のレベルの問題からオペラの訓練をする以前の声作りで大学の4年間で終わってしまうケースもある。原則として音楽大学卒業者のレベルを受験資格とするこの育成部でも、舞台経験はもちろん、オペラの授業を経験せずに入ってくる研究生も多い。従って「基本的な舞台での立ち方、舞台における常識、演出の先生を交えての舞台授業」など、やはり基本的なことから始める。そしてプロになるためには何よりもそうした基本が大切なのだと言う。

育成部は現在、研究生という2年制のオペラ専門課程を開講している。その特色は「主にイタリア語によるオペラ・アンサンブル、オペラ全曲の、歌唱法から音楽総合表現に至るまでを幅広く学ぶために、常に実践に主眼を置き、個々の素材を重視するため、少人数制のきめ細かな指導体制をとっている」ことにある。具体的には、1年目の「オペラ専門

コース」はオペラ・アンサンブルを核として歌唱と身体表現との総合体験を、2年目の「オペラマスターコース」は個々の成長と個性・資質を重視し、本舞台に向けたオペラ・アンサンブルとオペラ全曲の研修として、実践的な教育を行う。各コースの概要は別表に掲げたが、いずれも舞台に立つ人に必須の内容が学べるように科目化されている。

「オペラ演習」はグループで行うアンサンブルの練習で、一つのグループにつき講師陣は指揮者2名、ディクショングuidanceが1名、コレペティトゥールが2名、演出家が1名が原則で、このチームで音楽を作り、ディクションを正し、1年間勉強する。後期には演出のに入った練習が主になるそうだ。この講師陣に対し、学生の方の人数は専門コースが昼コース、夜コースを合わせて10名、マスターコースが13名なので、まさに「少人数制のきめ細やかな指導体制」が実現されている。

「演技」は台詞術をメインに演技そのものの方法を学ぶ。オペラマスターコースのこの授業では、ダリオ・ポニッスィさんを講師に招いてイタリアの伝統演劇「コンメディア・デッラルテ」の身体表現も取り入れているそうだ。

「日本歌曲」「日本舞踊」は明らかに日本オペラ協会での活躍を念頭に設定されている。《蝶々夫人》も含めて日本オペラの所作ができるためには「日本舞踊」は必要だろう。若い人たちにとって日本家屋もキモノも過去のものになってしまった昨今、プロになるためにはどこかで日本的な身体表現をきちんと学ばなければならない。「日本歌曲」は先に述べた大賀寛が授業を受け持っている。「大賀先生は日本歌曲もベルカントであるという考え方ですから、教わる方も、それで混乱を起こすことはない」と岡山廣幸氏は言う。「日本オペラ振興会の育成部ですから、両方をバランスよく勉強していかなければならない」と。

すると育成部に入ってきた時点では、ここでイタリア・オペラをやりたいとか、日本のオペラをやりたいとかの選択をすることはまだできないのだろうか？ 先にも述べたように、ここではまずイタリア語によるオペラ・アンサンブルを取り上げる。それがオペラの基礎であるという考え方からだ。

「現状では、教材として使っているのはモーツァルトのイタリア・オペラです。特に専門コースの方ではそうです。音大を卒業したけれどレチタティーヴォを歌ったことがないという学生は結構いるんですよ。レチタティーヴォをしっかり勉強してもらうためにも、モーツァルトのオペラはとてもいいのです」。

ところでカリキュラムのなかには「声楽実技」、つまり声楽のレッスンというものはない。あくまでもオペラを歌うための歌唱のテクニックは身につけているのが前提で、そのために選抜試験があり、合格した者だけが研究生になれる。それでも実際には、選抜試験のアリアは歌えたけれど別の曲は大変、という学生がたまに紛れ込んでくることもあるし、専門コースの時点ではまだ十分な水準に達していない学生がいるのも現状だ。そういう人たちは自分のテクニックを向上させるために、積極的に自分で指導者を探して声楽のレッスンを受けなければならないという。ここで学ぶのは声の出し方ではなく、舞台で表現するために必要なこと。オペラの中でどのようにソロやアンサンブルを歌うか、どのような様式で歌うか、演技をつけながらどのように表現するかということなのだ。

専門コースでモーツァルトを卒業したら、他のレパートリーをやるのですか？ 他のオペラに適性のある人たちもいるのでは？

「確かにいます。ですから、マスターコースに進んだ時点で、各学生の声に合ったレパートリーを、各クラス担当している講師た

ちが相談して決めて行くのです。この人には《ラ・ボエム》のミミをやって修了させようとか……。人に合わせるものでいろんなものが出てきます。後期バロックからヴェリズモまで。イタリアものがメインになりますけど、フランスものがあったり、以前ストラヴィンスキーの《マヴラ》をやったことがありました。強い声の学生だったので、やらせてみたのです」。

専門コースからマスターコースへ進級するには試験で規定以上の成績を収めなければならない。試験は年に2回、ソロとアンサンブルそれぞれの試験があり、他に日本歌曲試験や演技の試演が年1回ずつある。なかには落第する学生もいるそうで、それはプロをめざすのだからいたしかたない。進級できなかった者は1年に限りもう一度そのクラスで勉強し、再チャレンジができるそうである。

2年目マスターコースにおける大きな特色の一つは、オペラ1曲全部を修了公演として仕上げることだ。一応スタッフも付き、照明もあり、衣装もつけた公演になる。修了試験で優秀な成績を収めると藤原歌劇団の準団員または日本オペラ協会の準団員に推薦される。修了者のおよそ半数が準団員になるのが実績だそうである。

*

育成部は神奈川県川崎市新百合ヶ丘、昭和音楽大学北校舎の内部にあって、教育環境は整っている。授業はこの校舎の教室・スタジオで行われる。また試験は、ソロ歌唱試験がラ・サーラ・スカラという客席数184の小ホール、アンサンブル試験はオペラ練習用の第2、第3スタジオ、マスターコースの修了公演は本格的な音響・照明設備を備えた客席数246のスタジオ・リリエが使用される。

研究生は、特典として藤原歌劇団と日本オペラ振興会の公演を割引料金で見られる。「彼らは日本オペラも見に行き、藤原オペ

ラ公演も見に行きます。最近はみんなDVDばかりで満足する傾向があるけれど、実際の舞台を見ないと」と岡山氏。自分たちが取り組んでいるオペラがどういうものであるのか、実際の舞台を見て学び取ることは多いだろう。

組織的には、育成部は「公益財団法人日本オペラ振興会」の一部門なので、運営上の重要な決定は理事会でなされ、事務局が総務部、事業部、育成部を統括するかたちになっている。だから経済的な面ではさまざまな制約があり、修了公演の赤字幅を減らす対策等には理事や事務局との話し合いもある。しかし教育内容やカリキュラムについては育成部が責任を持ち、岡山廣幸・育成部長、岡山肇・育成部教務主任を中心に現場の指導者たちが決定しているという。

オペラ歌手育成の方法としては、今のシステムが唯一最良のものでしょうか？ すこし意地の悪い質問に、「ベストかどうかはわからないが、許される範囲でベストを尽くしています」と岡山氏。「もし僕に経済的余裕があったら、もう少し修了公演にお金をかけて、広いところでやらせてあげたいとか、声楽の実技試験も、大きなホールで声を聞きたいとか、そういう希望はありますけど、全部お金がらみですから……。でも方法論は変わりません」。

オペラ歌手を育てる簡単な方法はあるわけではない。その正しい、正統的な方法を育成部では行っているというわけである。

実際に藤原歌劇団の団員や準団員の数をみると、育成部の出身者はかなり増えてきている。佐藤美枝子、中鉢聡、三浦克次など第一線で歌っている人たちがいる。そうした人材が出てきているのが一番の実績だろう。

ただ最近の少子化は大きな問題になってきているという。またそれと同時に圧倒的な男性不足という問題もある。少子化による生徒

数の激減は、現在の音楽大学もかかえている問題で、すそ野が広くなければ優れた人材も出てにくくなる。「これに関しては、藤原歌劇団の団員で音楽大学で教えている人もかなりいるので、そういう人たちと情報交換して育成部の学生を増やす手段を一緒に考えています」。

そうした社会の変化に対応するという意味もあり、育成部には「研究生」のほかに「選科生」の制度も設けられた。「選科生」は1年制で、「声楽アミーチコース」「声楽ストゥーディオコース」「オペラ基礎コース」の3コースがある。これらは主にオペラに親しみ、楽しみながら学ぶという教養的な側面をもっている。しかし「オペラ基礎コース」だけは「研究生」に進む準備をするコースという位置づけであるため、18歳以上33歳未満という年齢制限を設けている。ソルフェージュやイタリア語の授業もあるので、音大で

学ばなかった人たちもここで歌唱に必須の基礎固めをすることができる。実際にここから研究生を受ける人も出ている。

社会の人口構成の急激な変化は、今後さまざまな分野で我々の生活に大きな変化をもたらすと予想されるが、音楽の分野も例外ではない。オペラを楽しむ高齢者がもし増えたとしても、実際に舞台に乗って歌い演じる若い世代がどんどん育ってこなければ、オペラの未来はどうなるだろう。オペラという実践的な芸術分野で活躍できる潜在能力をもった若者は、昨今の音楽大学が育てている学生以外にもたくさんいるはずで、そうした若者たちを発掘して育てるシステムはもっと充実させる余地があるだろう。もっともそれは本稿で紹介した「日本オペラ振興会オペラ歌手育成部」だけの話ではなく、音楽界全体が協力して考えなければならない大きな問題であるように思われる。

日本オペラ振興会 オペラ歌手育成部 研究生制度概要

平成25年度 募集要項を基に作成

オペラ専門コース	オペラマスターコース
●授業日 昼コース：月・(水)・金 10:00-13:00 夜コース：火・木・(金) 18:00-21:00 ※原則的に基幹授業が週2回。もう一日は年度を通して適宜行われる特別授業のための基本曜日。	●授業日 昼コース：火・木・(土) 10:00-13:00 夜コース：月・(水)・金 18:00-21:00 ※原則的に基幹授業が週2回。もう一日は年度を通して適宜行われる特別授業のための基本曜日。
●授業内容 オペラ演習、日本歌曲、日本舞踊、ダンス・ステップ、演技、メイク・服飾、オペラ史、舞台照明、芸術鑑賞 他	●授業内容 オペラ演習、日本歌曲、演技、メイク・服飾、オペラ史、舞台照明、新人育成オペラアンサンブル公演、芸術鑑賞 他
●試験 中間試験・進級試験 (ソロ・オペラアンサンブル) 日本歌曲試験 (年1回)、演技試演 (年1回) ☆ソロ試験課題曲 前期：1850年迄に作曲されたイタリア語によるオペラアリア 後期：イタリア語によるオペラアリア	●試験 中間試験・修了試験 (ソロ・オペラアンサンブル) 日本歌曲試験 (年1回)、演技試演 (年1回) 新人育成オペラアンサンブル公演
●進級 基準以上の成績をあげた者は進級することができる。また何らかの事情で進級できなかった者は、1年間に限り同コースに留まることができる。	●修了 基準以上の成績をあげた者は修了することができる。また何らかの事情で修了できなかった者は、1年間に限り同コースに留まることができる。マスターコースにおいて、修了試験に合格した者のうち成績優秀な者は、藤原歌劇団の準団員または日本オペラ協会の準会員に推薦される。